LOAD　～僕の心は、ここにない～

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＬＯＡＤ　～僕の心は、ここにない～

【Ｎコード】
Ｎ４９４９Ｑ

【作者名】
海土龍

【あらすじ】
探して！必ず見つけて！　教育実習生として母校に戻った成実は、いくつかの捜し物を頼まれた。それは以前、自分たちが悪戯に隠した物だ。それを見つけ出せなければ自分たちは死んでしまうという。いや、殺されるのだ。かつて自分たちが苛めていた少女の亡霊に。
【ファンタジックホラー】

1，ハンバーグと昔の仲間

――僕の心は、ここにない。

真由美が死んだ。
交通事故だった、と聞いている。
その数日後、絵里が駅のホームから線路に飛び降りた。

「このくらいの箱なんだけど、何だと思う？」

それが、数年ぶりに会った彼女たちの第一声だった。
声はすぐに辺りの喧噪の中に溶けて消える。
平日の昼だ。それなのに、ファミレスは制服を着た少年たちが席を陣取っていた。
ソファ席に反っくり返って座り、それぞれがＰＳＰの画面に夢中になっている。
お前たち、学校はどうした！？　教職を目指している身としては、思わずツッコミたくなる。
そんな彼らを横目に、成実はメニューを開いた。
「注文していい？」
高校を卒業してから早起きとは縁遠い生活をしている。

今朝も起きたら、朝ご飯を食べられる時間を疾うに過ぎていた。
だから、昼ご飯にはフライング過ぎる時間帯に、朝ご飯とは言えない食事をするしかない。
成実はメニューを捲り、ハンバーグの写真に目を落とした。
一日二食ライフも四年目ともなれば、お腹も不平を言わなくなっており、重めなブランチも美味しく頂ける。

「半熟目玉焼き乗せハンバーグセットとドリンクバー」

メニューの写真を指し示しながら注文してから、成実は二人に視線を送った。
彼女たちは緩く首を振る。

「……以上で」

ドリンクバーくらい頼めば良いのに、と思ったが、何も言わなかった。
そういう雰囲気ではないことは読めた。

「それで、何だって？」

成実はアイスティーをテーブルの上に置くと、理紗と美咲の顔を順に眺めた。
二人とも呉藍中学校の同級生で、成実と同じバスケットボール部に所属していた。
特に親しかったわけではない。部活以外で会話をした覚えもない。
それでも、あのきつい練習を三年間共に乗り越えてきたという仲間意識はある。
床を鳴らすバッシュ。バスケットボールの固い感触。ゴールが決まった時の嬉しさ。彼女たちの顔を見ると、すぐにでも思い出すこ

とができる。
ふと、美咲が顔を上げた。成実を見つめ、口を開く。
「呉藍中に教育実習に行くって、本当？」
「うん、手違いでね」
唐突な問いに些か面食らいながら成実は答えた。美咲は眉を寄せる。
「手違い？」
「原則的に中学校では、卒業生の受け入れはしないんだって。高校の教育実習は、母校でやるのが原則なのにね」
高校時代、非行に走ったつもりはないが、出身高校での教育実習を断られた成実は、中学校で実習をするしかなく、そのように市に申請したのだが、まさか母校の呉藍中学校で実習が決まるとは、これっぽちも予測していなかった。
これも呉藍中学校の副校長がボケていたおかげだ。
今年度赴任してきたという副校長は、四月の忙しさに追われて、実習生の出身校を調べることなく、実習許可を下したのである。
すべてが決定し、書類などを提出し終えた段階で、ようやくそのことに気が付いたが、もう後には引けない。
致し方ないということで、成実は来週から母校で教育実習を行うことになったのだ。
ズズッと、成実はストローを啜り、アイスティーを口に含んだ。
「成実は、あの子のこと、覚えてる？」
理彩の声は低い。聞き取れず、聞き返してから成実は思い出して、言葉無く頷いた。

「なら、見付けて欲しい物があるの」
言って、理彩は鞄から紙切れを取り出し、成実の前に広げた。
「上履き、バッシュ、筆箱、鞄……？」
読み上げて、成実は首を傾げる。
「何、これ？」
「覚えてないの？　これ、私たちが隠した、あの子の物よ」
息を呑む。――そうだ。そうだった。
美咲の指が紙の上を滑り、『バッシュ』の文字の上で止まった。
「バッシュは三足よ。確か、一足目は体育館の更衣室」
「二足目は舞台裏で、三足目は……」
「体育館裏に埋めた」
――覚えている。鮮明に。
成実はストローの先を、ぐっと噛み締めた。
上履きは一年A組の教室の掃除用具入れの中。筆箱は下駄箱に隠して、鞄は校庭の松の木の上。
「今もそこにあるか分からないけど」
理彩はそう言って俯いた。
成実はメモを受け取って、それをかざすように眺めた。
「この、最後に書いてある『箱』って？」

鞄の次、――リストの最後に『箱』と書かれているのに気が付いて、成実は顔を顰めた。
箱など、隠した覚えはない。
そう言うと、美咲は青ざめた顔で首を縦に振った。
「私も隠した覚えはないんだけど、真由美と絵里がね、死ぬ前に言っていたんだって。――箱を捜さないと、って」
真由美と絵里。
その名前を聞いて、成実は一瞬呼吸が止まった。
「夢を見るのよ」
俯いたまま理彩が静かに声を響かせる。
前髪で隠された表情は読めない。けれど、顔色が悪いことは明らかだ。
「呉藍中で、必死になって箱を捜している夢。教室も、廊下も、体育館も全部探すんだけど、どうしても見つからなくて。最初、昼間なんだけどね、だんだん辺りが暗くなってくるの。――闇が怖い。すごく怖いって、夢の中の私は震えていて。でも、どんどん近付いてくるそれを止めることができないの」
「夢の話だよね？」
ガタガタ震えだした理彩に、成実は素っ気なく言い放った。
キッ、と、理彩の瞳が鋭く成実を睨み付ける。
「そうよ、夢よ。――だけど、真由美も絵理も死ぬ前に同じ夢を見たって言っていたわ」

「同じ夢を？」

こくりと、理彩は頷いた。

成実はストローから口を離し、下唇を指でなぞった。

「どんな箱？」

「これくらいの箱よ」

理彩は両手で大きさを作る。それは、眼鏡ケース程の大きさの箱だった。

「何の箱？　中は？　何が入ってるの？」

理彩は首を横に振った。

「どこに隠したのか覚えていないんだよね？　美咲は隠した覚えもない。――本当にその箱、あるの？」

「あるわよ！」

ダンッ、と机が鳴る。

理彩の拳を見やり、成実は瞳の色を暗くした。分かった、と小さく呟く。

「探せばいいんでしょう？」

「見付けてよ！」

「見付ければいいんでしょう？」

こくり、と理彩は頷いた。

「実習はいつから？」

「五月二八日から。六月十五日までの三週間」
「来週の月曜日からね」

パラリ、と、美咲は手帳を捲る。
そして、隣に座る理彩の方に視線を送った。

「理彩、大丈夫？」
「……分からない」

怪訝な顔を理彩に、そして美咲に向けると、美咲が顔を近付けてきた。
成実は片耳を彼女に向かって僅かに傾ける。

「理彩は自分も真由美や絵里みたいに死ぬんだと思っているのよ」
「二人と同じ夢を見るから？」

囁かれるように言われた言葉に、潜めた声で返す。
美咲はテーブルに乗り上げていた体を元の位置に戻すと、小さく頷いた。

「お待たせ致しました」

成実の前に料理が置かれ、三人はハッとなる。しばらくの間、ハンバーグから上がる湯気を無言で眺め、美咲は席を立った。

「帰る」

用件はそれだけだから、と言って鞄を握り締めた。
理彩も腰を上げる。

「私も」

引き留める理由はない。成実はフォークを握った手を軽く振って答えた。

そして、はたと思い直して、二人の顔を見上げた。

「見付けたら、どうすればいい？」

「燃やして」

「ううん、その前に連絡して。確認したいから」

「分かった」

くるり、と、フォークを持ち直して、成実はハンバーグに突き刺した。

2，過去の場所

（自転車って、素敵だ）

当時は、五十分かけて登校していた覚えがある。

日差しが強い日も、吐く息が白い日も、教科書の入った学生鞄と部活道具の入った鞄を抱えて、ひたすら、ひたすら歩いていた。

そんな過去の自分を思い出すと、涙がちょちょ切れそうになる一方で、風を切るように自転車で駆ける今の自分は、なんて愉快なのだろう。

もうそれだけで心が浮きだってしまう。今の自分が、あの頃の自分に比べ偉くなったようにさえ思う。

過去の自分を思い起こさせる学生服の少年少女たちを自転車で追い越しながら、成実は優越感にひたりながら呉藍中学校の門をくぐった。

八時五分。自宅から十分もかかっていない。

「自転車、バンザイ！」

小さく喜びの声を上げると、校門のすぐ脇にある自転車置き場に自転車を止め、校舎を見上げた。

何も変わっていない。六年ぶりだということが嘘みたいだ。

思い起こすのは、六年前の三月。もう二度と足を踏み入れるつもりはないと、ここで過ごした三年間を切り捨てる気分で、ここを去った。

後輩たちから貰った小さな花束はいかにも儀礼的で、「おめでと

う」の言葉にも何一つ心を動かされるものはなかった。
その代わり、この場所から出て行けることへの嬉しさが湧き出て、胸の中に押し止めることができなかった。

ありがとう、と言って門を出た。そして、一度も校舎を振り返ることなく、歩き去った。

捨てた場所。
そんな思いがここにはある。

過去だ。
排水溝に流れて見えなくなった水のように、取り返すことのできない時間だ。
この場所は、自分にとってそういう場所だった。

なのに、今、自分はこうして再びここに戻り、校舎はあの時と同じ顔をして自分を迎えている。
ゾッとした。排水溝から汚い水が逆流して出てきたみたいに。
気持ち悪い。そう思って、成実は頭を左右に振った。そして、職員玄関へと足早に向かった。

▽▲

「校内を案内する必要はないわよね？」
山中は、ふっくらとした女性教師だ。
頭の後ろで団子にされた髪は、黒より白の方が勝っている。
成実は、はい、と言って頷いた。

職員室から廊下に出て、階段を下り、一年生の教室に向かう。
廊下に生徒たちの姿はない。本日は月曜日のため、体育館で朝礼があるのだ。今ごろ、体育館に整列しているはずだ。
成実は人気のない廊下を眺め、首を傾げた。
それは見慣れたものだったが、記憶よりも薄暗い。
違和感の元を見付けようと辺りを見渡す。気が付いて、成実は小さく声を上げた。

「あれ？」

B組の教室だった場所が、A組になっている。
そして、成実たちがA組の教室として使用していた教室は物置と化していた。

「どうかしたの？」

おっとりとした口調に、成実は振り向く。

「クラスの位置が変わっていて……」

驚いている最中です、と答えると、彼女は、ああ、と短く頷いた。

「生徒の数が減って、クラス数も、４クラスから3クラスに減ったからよ」

だから一番端にあるA組の教室を使用しなくなったのだ、と彼女は続けた。

「そう言えば、私の二つ前の学年までは5クラスあったらしいです。――子どもの数って、どんどん減っているんですね」

「それもあるでしょうけど、学区自由化になったでしょう？　学区で決められた中学校に進学しなければいけないのではなくて、自分で選んだ中学校に進学できるようになって、偏りが出るようになっているのよ」
「この学校、人気ないんですか？」

即座に切り返した問いに、山中はしばし閉口した。
１年Ｂ組の教室の前に来ると、足を止め、上着のポケットから取り出した鍵を、ガチャガチャと鳴らした。

「ドアに鍵を？」
「誰もいない時はね」
「私の時は鍵なんて閉めませんでした」

違和感というよりも、不快感を顕わにして言うと、山中は、仕方がないのよ、と言ってドアに鍵を掛けた。

「二年前、ボヤがあったの。期末試験中だったわ。トイレに煙が立ち込めていて、騒ぎになったのよ」
「知ってます、それ」

山中は目を見開いて成実に振り返った。
それから、ああ、と納得の声を上げる。

「あなた、ここの卒業生ですものね」

だが、成実は首を横に振った。
そして、なんてことも無いような口調で言った。

「ネットで知ったんですよ。ネットの掲示板で。『呉藍中』と検索

すれば出てきます。トイレで火遊びした生徒の実名も載っていましたから、どうにかした方がいいと思いますよ」
「それ、いつのこと？　今も載っているのかしら？」
「ここでの実習が決まった時に知ったので、四月頃です。たぶん今も載っていると思います。その子がどこの高校に進学したかも書いてありました」
「なんてこと……」

山中はサッと顔色を変えた。
だが、インターネット世界のことは、この年配の教師とっては未知の世界なのだろう。
その世界で何が起こっているのかを知ったところで、どう対処して良いのか分からない。
ただ、現実世界でいつもの職務をこなすだけだ。
彼女は教室の後ろのドアにも鍵を掛けて、腕時計を見やった。

「急ぎましょう。朝礼が始まる時間だわ」

言って、彼女は成実を促し、体育館に足を向けた。
成実はやや駆け足で彼女の背を追った。

▽▲

それはあまりにも暴力的で、絶望に近い感覚を成実に与えた。

（何ひとつ変わっていない）

照明も、床も、壁も。

数年で変われという方が無理なことなのだろうが、空気さえ変わらずにそれはそこに存在していた。
――体育館。
ほぼ休み無く、毎日行われた部活の時間を、成実はそこで過ごした。
辛かったこと。悲しかったこと。
もう投げ出したいと思ったこと。ちょっとだけ嬉しかったこと。
今ここに自分がいることが楽しいと思えたこと。
それらすべてがごちゃごちゃに詰まっている玉手箱のような場所だ。

天井を仰ぐと、バスケットゴールが目に映った。
とたん、ボールが跳ねる音が聞こえてきて、成実は頭を左右に振った。

ざわめき。舞台に向かって整列している生徒たち。
その視線を感じて、成実はハッとした。
幾人かの生徒が成実を見て、ひそひそと話をしている。成実は、グッと咽を鳴らした。

――教育実習生の心得その壱。
『生徒の前では、毅然と』

成実は生徒たちの視線に、ニコリと微笑むと、副校長の隣に足を進めた。
やがて校長の挨拶が終わり、その校長から舞台上で手招きを受けて、成実は舞台へと上がった。

――絶景。

同じ制服を着た集団が、同じような顔をしてこちらを見上げている。

数年前、自分もあの群れの中にいたのか、と思うと口元が緩んだ。

――ちゃんとネクタイを締めて。シャツを入れて。上書きの踵は踏まない。きちんと整列しなさい。顔を上げて、舞台の上の人が礼をしたら、合わせて礼をしなさい。

当時の声を思い出された。

もう二度と、成実に向かって言われることのない言葉だ。

「礼！」

副校長の声が響き、ハッとする。『気を付け』の号令を聞き逃した上、礼のタイミングを外した。

眉を顰めながら、成実はマイクに手を伸ばした。

――教育実習生の心得その弐。

『はじめましての挨拶は、インパクト命！』

成実は、すぅっと息を吸い込み、大声を張り上げた。

「私はクマです！」

どよっ。

マイクを通して体育館中に響き渡った大声に、生徒達のどよめき

が起こる。
予想通りの反応に満足して、成実はマイクを持ち直した。
「おはようございます。私の名前は、熊田成実(くまだ なるみ)です。教科は美術です。今日から三週間、皆さんと一緒に楽しく勉強できたらいいなぁ、と思っています」
しばしの間を作り、生徒たちの顔を見渡した。にっこりと笑顔を作る。
「私のことは、プーさんと呼んで下さい」
よろしくお願いします、と挨拶を締めて、一歩下がった。
副校長に眼で合図を送る。
「気を付け。礼！」
成実は颯爽と舞台を降りた。

3，いつも通りな日記

懐かしい笑い声に、成実は苦笑を漏らす。
彼も相変わらずのようで、堂々と美術室の机に腰を降ろしている。
沖田匡史。
呉藍中学校の美術教師で、成実が中学生だった頃は、呉藍中で一番若い教師だと言われていた。

「お前、変わったな」
「そんなことないよ」
「前はもっと、ねく……。物静かだっただろう？」
「今、根暗って言おうとしたよね？」
「……」

押し黙った沖田に成実は軽く肩を竦めた。

「根暗は今も変わらず。ただ、いろんな仮面を使い分けられるようになっただけ」
「仮面？　……そうか」

数年前、『仮面をたくさん持て』と言ったのは、この男だ。

――それは、嘘を付きながら生きろということ？
――いや、違うな。大人になれ、ということだ。

三月。もうじき卒業だという日に、成実は彼にそう言われて、舌を突き出した。

――それが大人になるっていうことなら、私は大人になんてなら

ない！
――楽に生きられるのに？
確かに彼の言うとおりで、正直なだけの生き方をしていた少女時代より今の方が幾分か楽になった。
口にした言葉が、もしも相手の心に届かなかったとしても、そのとき仮面を被っていたら、素顔を傷付けられることはないからだ。
仮面は何よりも強固な盾だ。
もはや成実はその盾を手放すつもりはない。

笑いが治まると、沖田は画用紙の枚数を数え始めた。
その指の動きを見つめながら、成実は沈黙した。

母校とは言え、六年も経っていれば大方の教師は入れ替わっている。
彼も今年度いっぱいで異動だと言う。
彼の他に知っている教師と言えば、音楽の上原かすみがいるが、若い彼女には、当時、男子生徒贔屓だという噂があった。
真偽のほどは分からないが、どちらにしても成実は彼女に良い印象を持っていなかった。

よし、と短く言って、沖田は机から腰を上げた。

「もうすぐ授業が始まる時間だな。今週は俺がやってみせるから、来週からは熊田がやってみろ」
「はい」
「指導案、書いておけよ」
「はーい」

成実はチラリと、黒板の上に掛けられた時計を見やった。

九時三十五分。とたんチャイムが鳴る。
成実は、朝イチで副校長から受け取った資料から時間割が書かれたプリントをファイルから取り出した。
そして、あと１０分もすれば美術室にやって来るクラスを確認する。
――２年Ｂ組。
たしか、環境ポスターを描く授業が行われる予定だ。
沖田が用意している画用紙の他に準備しておくべきものはないはずだ。
ならば、と成実はプリントをファイルに入れ直して、沖田に振り返った。

「そうちゃん、ちょっとトイレ行ってきてもいい？」

教卓を整理し始めた彼の背に向かって声を投げると、彼は振り返って、ケラケラ笑った。

「懐かしいな、それ」
「そうちゃん？」
「今の奴らは誰もそんな風に呼ばないぞ」
「そうなの？　『沖田』って言えば、『沖田総司』で、『そうちゃん』なのに？」

ニッと唇を横に引いて言えば、彼は片手をヒラヒラと振った。
トイレに行って来い、と言うのだ。
成実は頷き、美術室を出た。駆け足で廊下を行く。
美術室は四階に位置している。
トイレは当然、各階に設置されているが、それらは生徒用であり、実習生である成実は職員用のトイレを使わなければならなかった。
職員用のトイレは、職員室もある二階だ。

すれ違う生徒たちの視線を受けながら、成実は階段を駆け下りた。

▽▲

放課後。成実は実習生の控え室に戻った。

職員室の隣に設けられた実習生の控え室は、六畳ほどの広さがある。

ただし、その半分以上を物で埋め尽くされているため、けして広くはない。

おそらく常時は物置として使用されているのだろう。

積み重ねられた段ボールから、剣道の防具やバトミントンのラケットを見付けた。

他に何があるのかと、覗き込んでみれば、卓球の球が大量に詰まった段ボールがあった。

――ひっくり返したら、楽しそう。

さぞ勢いよく跳ね回るだろう。

あちこちに飛んでいく球を想像して、やってみたいという誘惑にも駆られた。

だが、昔から、刹那の感情よりも理性が勝る。

片付けるのが大変そうだ、と成実はそのまま段ボールの蓋を閉めた。

職員用の机が二つ。

朝、この机を見た時、自分の他にもう一人実習生がいるのかと思った。

だが、高校に比べ中学を実習する者は少ないらしく、成実の他に実習生はいない。
寂しい。つまらない。そう思う反面、気楽で良かった。

校内どこに行っても視線がある。
珍しい物を見るかのように、好奇な目を向けてくる生徒。無視されているより良いが、かなり不躾で、遠慮がない。
珍獣になった気分である。
おそらく珍獣だってそうなのだろうが、常に誰かの目があるというのは結構ストレスで、もと物置だろうが、一人でいられる空間は心から有り難いと思う。

成実は思い出して、鞄から紙切れを取り出した。
例の、理彩と美咲から渡されたメモだ。

捜し物は、七つ。
バッシュが三足、上履き、筆箱、鞄。そして、箱だ。

――下駄箱に隠したのは、筆箱だったかなぁ。

唯でさえ目があるのだから、無闇にウロウロして目立ちたくない。
確実に覚えている場所から探していきたい。
加えて、放課後の下駄箱なら、人目は少ないはず。
大半の生徒たちは下校を終えているし、部活動で残っている生徒も校庭や体育館に集まっている。
そして、文化系の部活も昇降口のある一階で活動しているところはないはずだ。

成実はもう一度メモの文字に目を落とすと、それを鞄に仕舞い、

実習日誌を机の上に広げた。
捜し物も大事だが、これもやっておかなければならない。
実習日誌は大学から出された課題で、毎日記録し、指導教師に提出するよう定められている。
成実の指導教師は、学級においては山中で、教科においては沖田になる。
二人は一日交代に成実の日誌を読み、コメントを記すことが義務づけられている。

ボールペンを指先で回しながら、今日一日のことを思い出していると、軽い音が二度響いた。
成実の返事を待ってドアが開く。山中だった。
成実は日誌を閉ざし、机の端へと退けた。

「今、いいかしら？」
「はい」

山中は両手に抱えるようにして持っていた冊子を机の上に置いた。
重ねられたそれは、数十冊ありそうだ。

「うちのクラスでは毎日日記を書いているの。三行日記なんだけど。今日からこれにコメントを付けてくれないかしら？」

疑問系の言い方だが、嫌です、と言える雰囲気ではないことは分かる。
分かりました、と言って成実は一番上の一冊を手に取ってみた。
ページをめくり、今日の日付のところを読み上げれば、一瞬思考が止まった。

『若い人が来た』

息が漏れる音が聞こえ、見やると、山中が笑っていた。
「あなたのことね」
「そうみたいですね。だけど、それ一文だけって……」
その生徒の日記は『若い人が来た』の一文で終わっている。
いくら三行日記とは言え、それだけかよっ、とツッコミを入れたくなる。
「みんな、大したこと書いていないわよ。『いつも通りでした』で終わる子が大半ね。でも、そこから見える何かがあると、わたしは思うのよ」
「そうですね」
――異論はない。
生徒のことを知りたいという山中の気持ちも分かる。
成実は筆箱から赤ペンを取り出すと、指先でくるりと回した。
「終わったら、職員室のわたしの机の上に置いておいてね」
「はい」
山中の背中を見送ってから、『若い人が来た』の下に『プーさんです。よろしく』と赤ペンを滑らせた。
実習日誌は途中で置いておき、まずはこちらから片付けることにした。

山中の学級である一年B組は三十三人の生徒がいる。
不登校生徒が一人いるので、三十二人分の日記を読み終えて、成実は眉を寄せた。
今日は実習生がやって来た初日なのだから、いつも通りのはずがないのに、『いつも通りでした』と書いた生徒が六人いたのだ。

――この子たちにとって『いつも通り』って、何なんだろう？

成実は『いつも通り』の下にも『プーさんです。よろしく』と記した。
他には、毎日のように『つかれた』と書く生徒。
『つまらない』や『ねむい』、『めんどくさい』の一言しか書いていない生徒もいる。
彼らへのコメントは『私も疲れた』『私も人生つまらない』『私も眠い』『私も面倒臭い』などと記した。

成実は、書き終えた生徒たちの日記冊子と実習日誌を抱えて職員室に向かった。
それらを山中の机の上に置くと、副校長の姿を探す。
職員室の一番前の机で、突っ伏すように仕事をしている痩身な男が副校長だ。暗めな色のスーツを着ている。
成実が机に近づくと、ふっと顔を上げた。

「今日の実習は終わりましたか？」
「はい」

チラリと、彼の背後の壁掛け時計に目を向ける。
六時五分。

実習生は六時を過ぎれば帰って良いことになっている。もっとも明日の準備を含め、作業が終わっていなければ帰宅できない。
逆に、いくら作業が終わっていたとしても、六時までの教職員の勤務時間を過ぎなければ帰れないことになっている。

「お疲れ様でした」

にっこりとして言われ、成実はぺこりと頭を下げて、ありがとうございました、と返した。

4，埃まみれの筆箱

後ろ手に職員室のドアを閉めて、成実は、さて、と拳を握った。
職員玄関は二階にあるが、成実は足を階段に向けた。
向かったのは、一階。昇降口の方だ。

時間帯のせいか、それとも構造のせいか、昇降口付近はどんよりと暗い。
黒いベールが掛かっているのではないかと思ってしまう。
昇降口は西向きにつくられている。
そのため朝日は入らない。夕陽も、長く飛び出た屋根に遮られてしまうため、常に薄暗いのだ。

廊下の電気を点けようと、スイッチを探して辺りを見渡した時だった。
成実は彼女に気が付いた。
肩に付くか付かないかの長さに髪を切りそろえ、正しく制服を着込んでいる少女。
見覚えのある顔だ。確か、一年B組の生徒だった気がする。
名前を思い出そうとして、頭を左右に振った。
いくら担当クラスだからと言って、初日から生徒全員の名前を覚えていたら、驚異だ。

成実はゆっくりと少女に歩み寄った。
彼女の行動が異常であることは見てすぐに分かった。
床に両手を着き、顔を床すれすれに近付けている。
しかし、そうかと思えば、下駄箱に足を掛け、その上を覗き込む。

成実は一種の直感を働かせて、彼女に声を掛けた。

「一緒に探してあげる」

弾かれたように彼女は振り向いた。

鋭い眼が成実を突き刺した。

だが、それは一瞬。成実を認めると、その瞳はしだいに色を失せ、伏せられた。

「……結構です」

「探しているのは、靴？　――私、探すの得意なんだ」

押し黙って彼女は、成実を拒絶している。

顔をそむけ、話しかけるな、と無言で叫んでいる。

そうだと分かっていても、成実はそれを無視した。

彼女と並んで、彼女の靴――ではなく、筆箱を探した。

「確か……」

小さく呟くと、一年A組の下駄箱の側面に移動する。

下駄箱は、一年A組から三年E組の順に並んでおり、両クラスの下駄箱がその端となっている。

この二つの下駄箱は、壁に沿って立てられている。

だが、成実は知っている。

一年A組の下駄箱は壁から僅かに離れていて、拳ほど隙間があることを。

――ここだ。

隙間を隠すように置かれた掃除用具入れを、ガタガタ言わせながら移動させると、成実は床に膝を着いた。
思わず、笑いが漏れた。
隙間を塞ぐように茶色い革靴が詰められている。
――やっぱり、いつの時代も考えることは、みんな同じか。
成実は少女に振り返り、彼女の背に向かって声を掛けた。
「あったよ」
少女はゆっくりと成実を振り返り、眉間に皺を寄せた。
「ほら、早く来なよ」
成実は手招く。そして、掃除用具入れの中から、柄の長いホウキを取り出した。
ホウキの柄を隙間に差し入れ、中から外へと靴を押し出す。
取り出した靴は埃で薄汚れていたが、壊れたところはないようだ。
成実は軽く埃を叩いてから、靴を少女に差し出した。
少女はそれを受け取り、まじまじと見つめる。まるで不思議な物を見るような目だ。
成実がいとも簡単に見つけてしまったことが信じられないのだ。
「……ありがとうございます」
「どういたしまして」
ぎこちなく言われた例に、にっこりして、成実は再びホウキを隙間に差し入れた。
奥から手前へと動かすと、消しゴムやらシャーペンやら、くしゃ

くしゃの学級新聞、破れたテストの解答用紙、などなど様々な物が出てきた。
薄暗い昇降口の僅かな明かりを受けて、埃が舞っているのが見える。
鼻が、つーん、と痛くなり、成実は唇を固く結び呼吸を止め、ホウキをうごかした。
そして、ようやくお目当ての物が姿を現す。――筆箱だ。

記憶の中では、淡いオレンジ色だった。
だが、今目の前にするそれは、灰色。
触れると、ザラリと嫌な感触がした。

親指と人差し指だけで摘み上げ、水道に走った。
昇降口を出てすぐのところに水道があり、成実は勢いよく蛇口を捻った。
灰色は水に触れると、すぐに色を濃くし、いくつもの小さな埃の塊をつくる。
そして、それら塊は、水に押し流されながら排水溝に落ちていった。
記憶通りのオレンジ色になれば、不快感なく持てるようになった。
成実は蛇口を閉め、筆箱を手に取った。

――中のことは、考えないようにしよう。

とは言え、幸いなことに、ビニール素材なので、中まで水が染み込んだとは思えない。
だが、もしも濡れて困るような物が入っていたとしても、もはやこの筆箱の持ち主はこれを必要としていないだろう。

――とりあえず、一つ。

成実は筆箱を大きき振り、水気を払った。

5，朝礼

はい、と渡されて、成実はそれに目を落とした。
――出席簿。
黒い厚紙の表紙を捲り、中をパラパラと確認する。

「書き方は分かるわね？」
「はい」

些か不安だったが、出席簿の一番後ろのページに書き方が記載してあるのを見付け、成実は頷いた。

「今日から朝学活と終学活をやってみましょうね」

やる。――と言っても、その日の日直が司会をするので、教師がやることは少ない。
連絡事項を伝えるくらいだ。

「あのう。朝学活で出欠を取る時、名前を呼びたいんですけど、いいですか？」
「いいわよ」
「それで、いくつか読み方が分からない名前があるので教えて下さい」

――教育実習生の心得その参。
『生徒の名前は間違えるな！　名前漢字は難しいので、事前に確認せよ』

子どもはあらゆる手を使って大人を試すものだが、生徒が一番初

めに教師を試す方法は、その生徒自身の名前なのだという。
教師が、自分の名前を正しく読んでくれるか。
特に読み方が通常とは異なる漢字を使っている名前の生徒に多く見られることだ。
正しく読めたなら、ある程度は認めてくれるものだが、誤った読み方をすればたちまち距離を置くようになる。
見下して、彼らは嗤うのだ。
成実は、昨日受け取ってチェック済みのクラス名簿から、何人かの名前を山中に確認すると、その漢字の上にフリガナを振った。

朝学活の時間は、八時半から四十分までの十分間。
その間に、日直の司会で、保険委員がクラスメイトたちの健康調査をしたり、生活委員が忘れ物のチェックなどをする。
その後に教師が出欠確認をし、本日の連絡事項を伝える番となるのだが、何と言っても、時間がない。
三十三人分の名前を呼んでいたら、それだけで、時間オーバーしてしまう。
故に多くの教師たちは、ぱっと教室を見渡し、空いている席を見付け、欠席者を知る。

成実が一人一人の名前を呼ぶ許可を山中から得たのは、そうするようにと大学の講義で教わったからだ。
点呼には返ってくる声の調子でその者の体調を知ることができるのだという。
短期間で名前と顔を一致させる手段としても有効である。

成実が一年B組の教室に足を踏み入れると、生徒たちは水を打ったように静まりかえり、一斉に成実を振り返った。
教卓の前を素通りし、窓際に寄ると、彼らを見つめ返した。

「日直さん、朝学活を始めて下さい」

成実が言うと、おずおずと前に出てきた少年がいた。朝学活が始まる。

しばらくあって、日直の少年が教室の後方に立つ山中に視線を送り、それから成実に振り返った。

「先生のお話です」

成実は少年と入れ替わるように、教卓の前に立った。

「出欠を確認します。名前を呼ぶので呼ばれたら大きく返事をして下さい。――大きい声を出すのが恥ずかしかったら、手を高く上げてね」

にっこりして言うと、成実は出席簿に目を落とした。

まずは男子から名前を呼んでいく。

近頃は男女混合で出席番号を定める学校が多いのだが、ここはまだ男女で別れた番号だった。

顔と名前を確認しながら、ゆっくりと読み進める。

その間に、成実は昨日下駄箱で会った少女を見つけ出していた。

男子が終わり、次は女子の名前を呼ぶ。

明るい声、眠そうな声、恥ずかしそうだが、それでも小さい声が返ってくる。

そして、ついに教室は沈黙した。

「間口萌さん」

すぅっと高く伸ばされた腕。成実はわずかに眼を大きくする。
――あの子だ。
萌という名を記憶に刻んで、名簿の次の名前を呼んだ。

▽▲

「間口さんって、どういう子ですか？」
朝学活が終わり、職員室に戻る途中で、成実は山中に尋ねた。
山中は眉間に皺を寄せる。
「間口さん？　大人しくて目立たない子よ。成績も中くらいで。でも、運動はできるみたい」
「部活は……？」
「入っていないみたいね」
「今は必修ではないんですよね？　私の時は、全員何かしらの部活に入らないといけませんでした」
「あなたは何部に入っていたの？」
「バスケ部です」
あら、と言って、山中は立ち止まり、成実を見つめる。
上から下へ。まるで品定めをするかのように見やり、意外そうな表情を浮かべた。
成実は苦笑する。
「よく運動ができないと思われます。ですけど、こう見えて、中学時代、体育の成績は常に『5』だったんです」
「まあ、ごめんなさいね」

「いいえ。――ところで、女子バスケ部は健在ですか？」
「もちろんよ。なかなか強いのよ」
まさか、と言って、成実は肩を竦める。
「私の時は、毎回、一回戦で敗退してました」
「そうなの？」
再び意外そうな顔をして、山中は職員室のドアを開いた。
成実を促して、自分の机の方へと足を進める。
「部員数も少なかったですし、練習もいい加減でした。よく悪さして、部活動を禁止されてましたし」
「悪さ？」
「学校で飴を食べたり、寄り道をしたり、横断歩道ではない道路で横断したり」
山中はクスクスと笑った。
『悪さ』とは言えないような悪さを上げたので面白かったのだろう。
確かに、過去に怒られた様々なことは今になってみれば、結構どうでも良いようなことが多い。
なぜあの時あれほど怒られなければならなかったのか、理解に苦しむ。
校則を破った事に対する反省はすべきだ。
だけど、たかが飴を食べたくらいで、数週間も部活動を禁止されることだろうか。
そう言うと、山中は昨日提出した実習日誌を成実の手の上に乗せて、口を開いた。

「だけど、そうやって怒られてきたから、今のあなたがあるのでしょう？」
「今の私……ですか？」
「あなたは真面目だわ」

ぴくり、と成実の片眉が跳ねた。
だが、すぐに仮面を被りなおした。

「……そうかもしれませんね」

同意の言葉を述べて、薄く微笑んだ。

▽▲

聞くところによると、高校での実習だと、昼食は控え室で食べて良いとされているらしい。
だが、給食のある中学校での実習では、配属クラスで食べなくてはならない。
――これがなかなかの苦痛となった。

『いただきます』の僅か五分後には半数以上の生徒が『ごちそうさま』をしている。
食べ終えた生徒から昼休みになり、まだ食べている者がいるというのに、その近くでドタバタ遊び出すのだ。
そんなところゆっくり食事ができるわけがなく、成実は牛乳とパンを半分口にしただけで手を合わせた。

「そんなに残して……」
残飯ケースにおかずを流し込んでいると、成実の手元を覗き込んで山中が言った。
「緊張で食べられないんです」
「あら、緊張しているの？」
そんな風には見えない、と言われ、成実は苦笑する。
山中が教室を去った後も、できる限り生徒と過ごすようにと言われている成実は、そのまま教室に残り、机を並べておしゃべりしている女の子たちの輪に加わった。

――教育実習生の心得その肆。
『中学生は怖い話とエロ話が好き』

二年生ならばエロ話の方が大喜びされるが、一年生なので、怖い話を持ちかける。
成実が一つ話を終えると、こういう話もあると、次は女の子たちの方から語りだした。
気が付くと、いつの間にか、男の子たちも集まってきていて、よくよく見ると、他のクラスの生徒の顔もあった。
成実と話したいというよりも、実習生の存在が珍しくてやって来たのだ。
当然、怖いのはダメという子もいて、その子たちは遠巻きにこちらを伺っている。
「プーさん、知ってる？　この学校で自殺した人がいるんだって！」
「へえ」

成実は目を細め、本当に？　と疑うような言葉を口にした。
「お兄ちゃんから聞いた話だから、本当だよ。何年か前に、女の子が飛び降りたんだって」
「ああ、俺もそれ知ってる。教室の窓から落っこちたんだろ？」
「教室の？　ええっ。どこの？」
「確か、三年C組だって聞いた」
「じゃあ。あの辺に落ちたのかな？」
一人の男の子が窓をガラリと開けて、体を乗り出す。彼が指差した先は一年C組の教室の前だ。
成実は頭を左右に振った。
「違うよ。それが数年前の話なら、その時の三年C組の教室は、今で言う三年B組の教室だから、そこから真下に落ちたとしたら、落ちた先はこの教室……一年B組の前」
――つまり、あそこ。
そう言って、成実は真っ直ぐ外に向かって指差した。
教室の前は小さな花壇となっている。誰が世話をしているのか、小さな花が綺麗に咲いている。
成実の人差し指を凝視した後で、生徒たちは口々に悲鳴を上げる。
「ウソ！　怖い！」
「本当にそこに落ちたのかよっ」
成実は椅子から腰を上げた。直にチャイムが鳴る。
すっかり浮き足立っている生徒たちを見渡し、成実は悪戯っ子の顔をする。

「次は理科でしょう？　教室移動なんじゃないの？」
「そうだった！」

蜘蛛の子を散らすように、パッと人だかりは消え、それぞれ自分の席に戻っていく。
彼らは教科書と筆記用具を手に教室から飛び出していった。
成実も美術室に向かおうと、踵を返した時だった。彼女に気が付いた。
――間口萌。
他に誰もいない教室。萌は床に膝を着いて、机の中を覗き込んでいる。
成実は腰に左手を置いて、僅かに首を傾げる。

「手伝おうか？」

弾けるように、萌が顔を上げた。

「教科書？　それとも、筆箱？」

萌の手の中を見て、教科書だと知る。
ギュッと握り締められた筆箱は、手の形に変形している。
成実は教室をぐるりと見回して、黒板の横に設けられた本棚に歩み寄った。

「たぶん、ここ」

背表紙から突っ込まれている本を数冊抜き出し、その中から理科の教科書を探し出した。
思った通り、裏表紙に萌の名前がある。

「はい」
萌は焦れったくなるほどゆっくりと近付いてきて、成実の手から教科書を受け取った。
「……ありがとうございます」
「どういたしまして」
何気なく言い、成実は萌に背を向けた。教室から出て行こうとする。
「あのう！」
振り返ると、萌が教科書を両腕に抱え、俯いている。
「何？」
「……」
成実は引き返し、萌の前に立った。
「どうしたの？」
「……言わないで下さい」
一瞬、成実の目が大きく開かれる。
だが、すぐに笑みを取り戻し、分かった、と口にした。
答えがあっさり過ぎて、逆に不安を感じたのだろう。萌は顔を上げて、成実を見た。
成実は肩を竦める。
「早く理科室に行かないと、遅刻しちゃうよ？」

「……私」
「ん？」
「私、イジメられてません！」
「うん。分かってる」

成実は眼を細めて、萌の顔を見下ろした。
くしゃりと、その頭を撫でると、踵を返し、教室を去った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4949q/

LOAD　～僕の心は、ここにない～

2011年2月19日19時06分発行